

3) ワタ＝綿

ワタはアオイ科ワタ属の多年草植物の総称で、綿花や綿実油をとるために古くから栽培されている。茎は直立し高さ 1~1.5m、葉は掌状で浅く 3~5 裂し、長い葉柄を持ち互生する。花は 7~8 月頃に、径 5~6cm で大型の美しい 5 弁花を咲かせる。白色、黄色、紅色の花は、朝早く開いて夕方には閉じてしまう一日花である。花が終わると果実は球状となり、完熟すると実が割れて中から繊維をつけた種子が現れる。これを収穫して漶ったものが綿糸で、布にしたものが綿布である。和名の起こりは仁徳天皇の頃、百済から帰化した人たちが作った絹綿が、肌(ハダ)に優しく温かだったために、「秦(ハ)という姓を賜ったところから、これが「ワタ」になったという。学名は『*Gossypium*』で、属名はワタのラテン名で、熟して膨らんだ果実を *gossium* (腫れ物)に例えたことによるもので、英国では『cotton plant』と呼ばれている。日本では古くは蚕から採った「絹」を「綿」と呼んでおり、江戸時代以降になると、綿を「木綿」として、絹綿は「真綿」と呼んで区別するようになった。従って室町時代以前の綿は絹のことを言い、絹が伝わる以前は広く繊維のことを言っていたらしい。一方「木綿」はかつては「ユウ」といって木からとった繊維のことを意味していた。陰暦の九月八日の夜、菊の花に綿を被せて霜除けとすることを「綿着す」と言った。翌九月九日の重陽の節句に、菊の花の夜露と香りに移しとった綿で、身を清めると長生きできるとされていた。この頃の綿はもちろん「真綿」(05-01-09-3 菊の項参照)であった。

綿は極めて古くから、人間の手で栽培されてきた植物性繊維の一つである。紀元前 5800 年頃のメキシコの遺跡から果実が発掘されており、またインドのモヘンジョ・ダロの遺跡からは、紀元前 3500 年頃の地層から綿糸が発見されている。おそらく紀元前 2500~2000 年頃には栽培下にあったものと思われ、アジアでもアメリカ大陸でも、やがて周辺諸国に広がっていった。アメリカ大陸ではコロンブスが来航したときには、すでに中南米から西インド諸島で綿が栽培されていた。エジプトでは紀元前の時代には亜麻が栽培されていたが、やがて綿に変わり、その後アラビア商人たちによって、次第にヨーロッパにも綿が伝えられ、地中海沿岸地方でもそれまでの亜麻に代わって、綿が栽培されるようになった。

『日本後紀』には 799 年(延暦 18 年)7 月に、天竺から三河に漂着した者によって、綿が伝えられたことが記されており、その後、綿の栽培が三河や紀州などで行なわれたが、この時には定着することはなかった。その後、江戸時代になると中国、朝鮮から綿の種子が伝えられ、本格的に栽培されるようになり、まずは九州からやがて関東地方にまで栽培の範囲が広がった。また各藩は綿の栽培を奨励したため、綿の生産は急速に進み、絹織物の盛んだった日本では、綿の生産量は需要を大きく上回り、世界的な綿の輸出国となった。しかしやがて庶民が蒲団の中に綿をつめるようになり、綿の需要は大きく膨らんだが、これも江戸などの都市が中心で、山村や農村では

相変わらずワラを詰めた蒲団がほとんどであった。日本中で綿蒲団が用いられるようになったのは、明治になってからのことである。

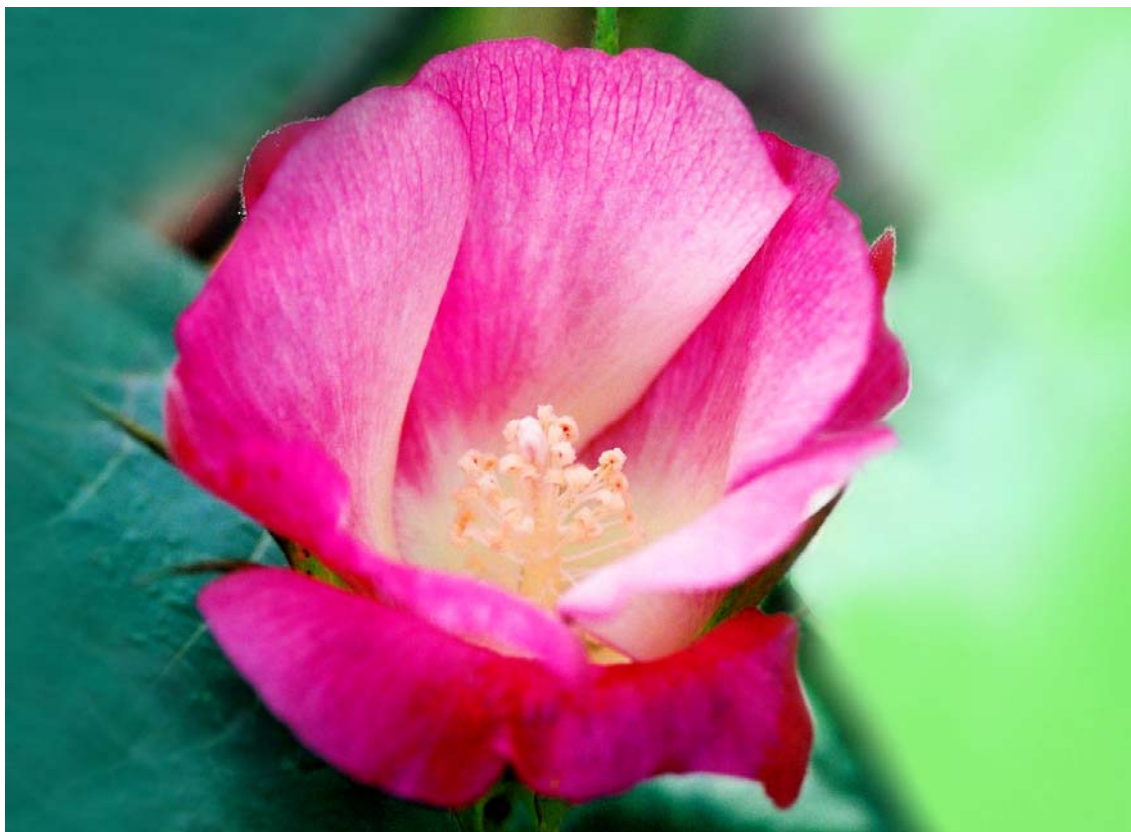
明治になると時の政府は殖産工業として、綿紡績を輸出産業の柱に据えたことから、その規模は世界最大級にまで発展したが、その後安価な外国産の原綿を輸入し、これを加工するようになったため、国内の綿の生産は急速に減少していった。

綿を作るにはまず果実を集めて、種子と綿毛を分離して、綿糸、綿織物、脱脂綿などにする。綿毛からは多くの綿実油が採れ、食用油やマーガリンなどの原料にされていた。この搾り滓も蛋白質を含んでいるため、肥料にしたり家畜の飼料などに用いられた。また種子と綿毛を分離する工程は2回行なわれ、最初に分離された綿毛は、綿糸として織物の原料に、2回目のもはセルロースとしてセルロイドやレーヨンなどの原料になる。綿花は土質を選ぶこともなく、日照時間と気候さえ折合えば、効率の良い作物であったから、特にアメリカ南部では次第に新大陸の開墾が進むと、白人たちの手によって綿花の栽培が盛んに行なわれるようになった。しかし綿栽培は収穫期が繁忙のため、黒人奴隷をつれてきて収穫させることとなり、これが『奴隷制』の端緒となった。そして1800年代になると綿栽培はそれまでの煙草栽培に替って急速に広まった。当時イギリスでは産業革命のさなかで、ホイットニーが綿繰機を発明すると、綿花の需要が急速に拡大し、綿栽培は煙草栽培よりもずっと効率の良い商品になった。しかし奴隷制度に支えられた綿栽培は、アメリカ本来のピューリタンの理想とは大きく乖離し、そのことが『南北戦争』の一つの原因になり、マーガレット・ミCHELの『風とともに去りぬ』の背景でもあった。

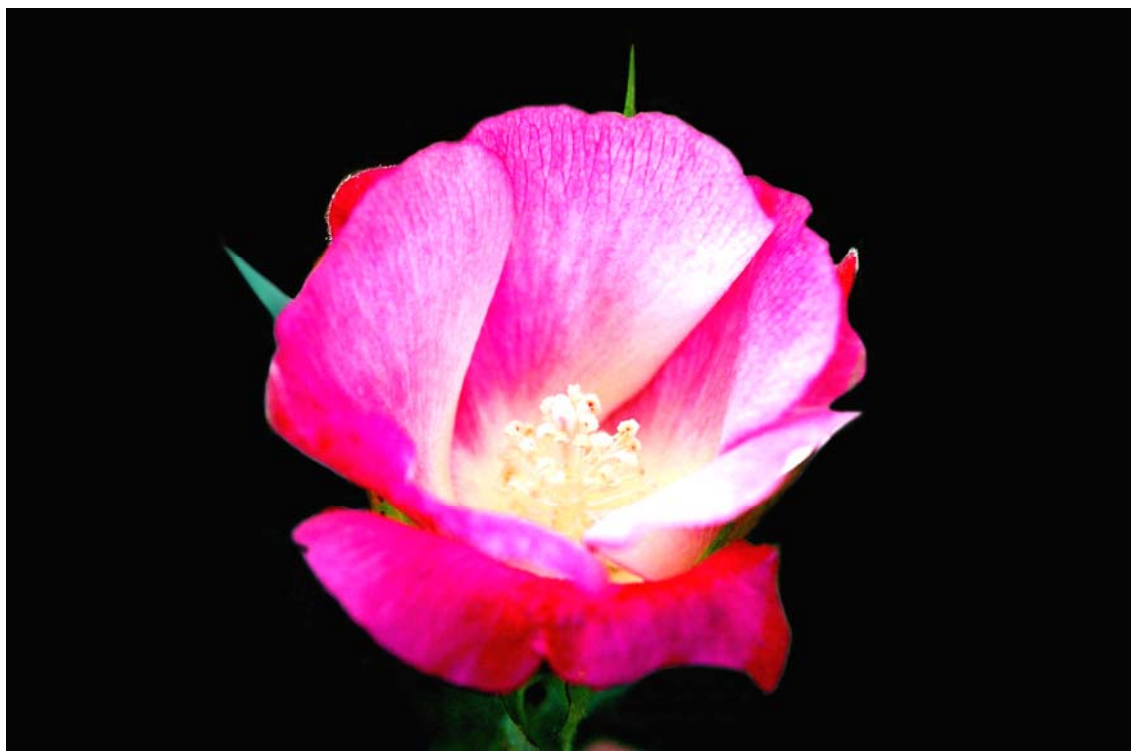
『南北戦争』は1860年秋の大統領選挙により、共和党のリンカーンが当選すると、サウス・カロライナ州がまず合衆国から離脱し、続いて翌年には、ミシシッピ州、アラバマ州、ルイジアナ州、ジョージア州、フロリダ州、テキサス州が同様に合衆国から離脱した。これら諸州の代表はアラバマ州モントゴメリーに集結して、『南部連合』(Confederate states of America)を樹立し、ジェファーソン・デービスを大統領に選出するとともに、奴隷制度を認める憲法を制定し、合衆国と敵対する関係になった。そして南軍がサウス・カロライナ州のサムスターにあった北軍の要塞を攻撃したことにより、ついに内戦が勃発した。リンカーンはこれに対して75,000名の志願兵を募集し、南部の海上封鎖を行なって経済封鎖作戦に出た。その後ノース・カロライナ州、バージニア州、アーカンソー州、テネシー州も南部連合に参加し、南北の戦力は拮抗することとなる。しかしその一方でケンタッキー州、デラウエア州、メリーランド州、ミズーリ州の諸州とバージニア州の西部の住人は、奴隷州であったにもかかわらず合衆国にとどまった。ウエスト・バージニア州がバージニア州から分離独立して合衆国入りしたのはこの時である。また当時の南部諸州は農業が中心で、大砲や鉄砲を量産できる態勢にはなく、一方の北軍は産業革命の影響も受けてヨーロッパ諸国に匹敵

する工業力を備えていた。しかし南軍の攻撃は当初は熾烈を極め、戦力が整っていなかった北軍を突破し、一気にワシントンまで攻め上る感を呈した。このため北軍は1861年7月に常備軍を拡大し、あらたに50万人の義勇兵を募集して、戦時体制を整えたが、南北両軍の主力同士が初めて戦った第1次ブルランの戦では、南軍に大敗を喫し長期戦の構えとなり、南北両軍は一進一退を繰り返した。しかし1862年9月のアンティタムの戦いになると、戦況は次第に北軍有利に変わり始めた。そして翌年の1月1日リンカーンは『奴隷解放宣言』を行ない、この戦争目的と民主主義の理念を全世界の国々に明示した。さらに1863年11月には激戦地ゲチスバークの戦没者慰霊祭で、『government of the people by the people, for the people』と演説したが、この言葉は民主主義の基本理念として、またアメリカが建国以来掲げてきた国家の理想として、現在でも世界中から高く評価されている。以後の戦況は北軍優勢のうちに進み、1865年には南部連合が首都と定めていたリッチモンドが北軍の手に落ち、南軍のリー将軍は北軍のグラント将軍(02-03-11 タイサンボクの項参照)に降伏して内戦は終わった。この戦争の結果、北部の産業資本は南部という新たな市場を獲得して、アメリカ資本主義の目覚ましい発展へと進むきっかけとなったのだが、この戦争では初めて機関銃が使われるなど、近代戦争の足がかりになったことは注目されよう。

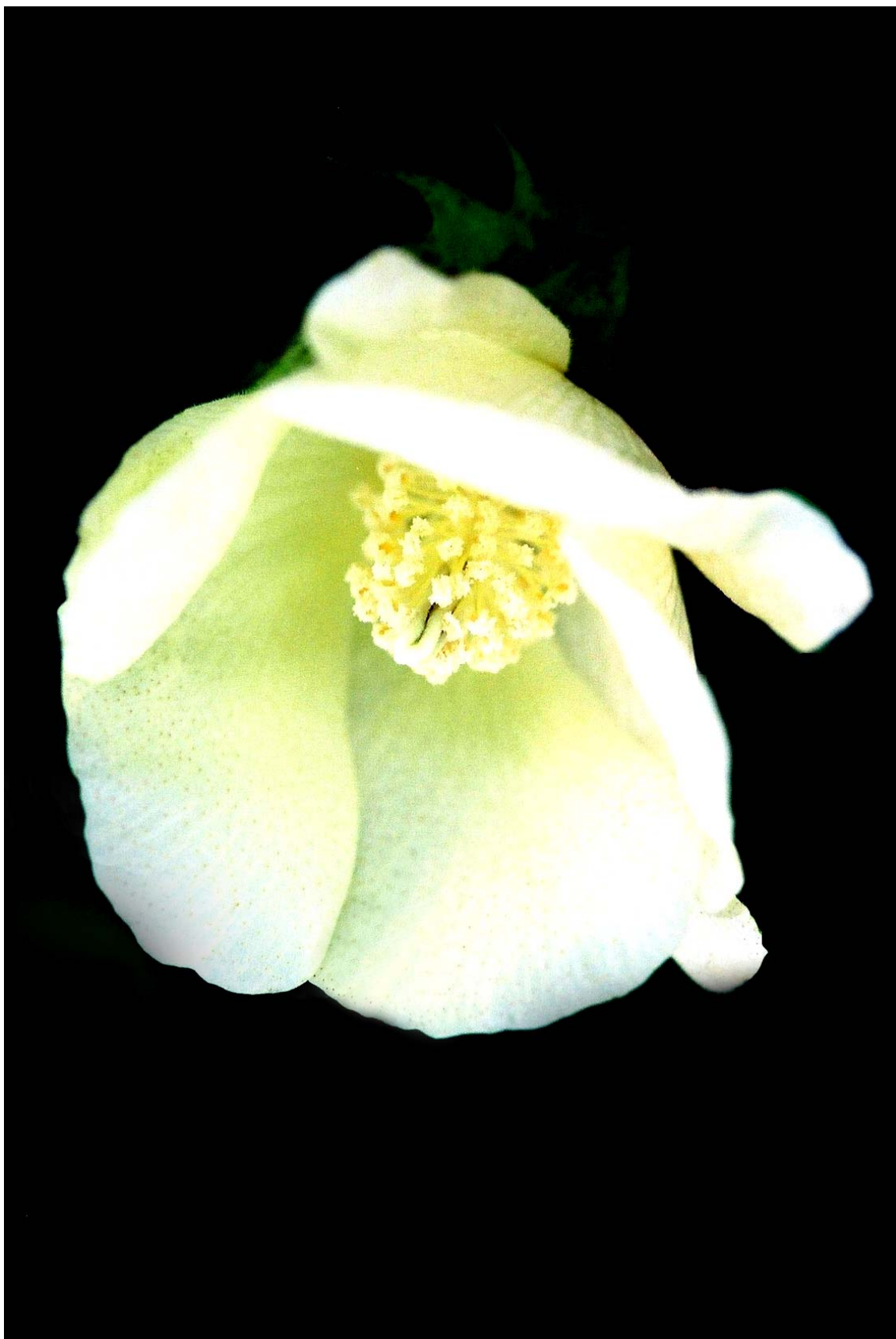
さて綿に関わる言葉もまた極めて多い。綿は柔らかいことの例えでもあり、綿のような雲などとして用いられることも多いが、盗人仲間の隠語では、雪のことを綿と言う。また「綿で首」とか、「綿で首を絞める」というのは、遠まわしにじわじわと責めたり苦しめたりすることの例えで、「綿に針を包む」は表向きは穏やかであるが、裏では陰険であるときに用いられた。「綿を釘付けにする」というのは、「糠に釘」や「豆腐にかすがい」などと同じで、効き目の無いことの例えとして用い、「綿打ちの昼寝」は怠け者が一旦休憩すると、なかなか仕事に戻らない様を言ったものである。「綿入れ」は着物の裏地と表地の間に、綿を入れて縫い合わせたもので、絹の表地のものを「小袖」(コソデ)といい、木綿または麻のものを「布子」(ヌノコ)といった。小袖には真綿を用い、布子には綿や苧屑(オクズ)を入れることが多かった。「綿入羽織」や「綿入帽子」などは防寒用に綿を入れた、いわゆる「綿入れ物」である。「綿帽子」は真綿を平たくしたかぶりもので、明治以降になると真綿を用いずに木綿で作ったものもあった。これは特に婚礼の時に、新婦が顔を覆うために被るものであったが、もともとは丸い形をしていたものが、明治以降は「角隠し」と称して、揚げ帽子を用いるようになった。木の枝や山に雪が積もっている様を「綿帽子を被る」ともいう。しかし「綿帽子」はまた盗人仲間では火事のことをいう隠語であった。「綿帽子雪」とか「綿雪」は大片の雪のことをいった。「綿摘み」は江戸時代、塗り桶という道具を用いて綿入れにする綿を、平たく伸ばす作業であったが、この作業をする女性のこともいい、これは表向きのことで、実際には密かに淫売をする私娼のこともあった。



紅色のワタの花。この果実を収穫するためにアフリカから連れて来た奴隷が使われた。アメリカが今日の姿に変貌する、ずっと以前の話である(さいたま市緑区)



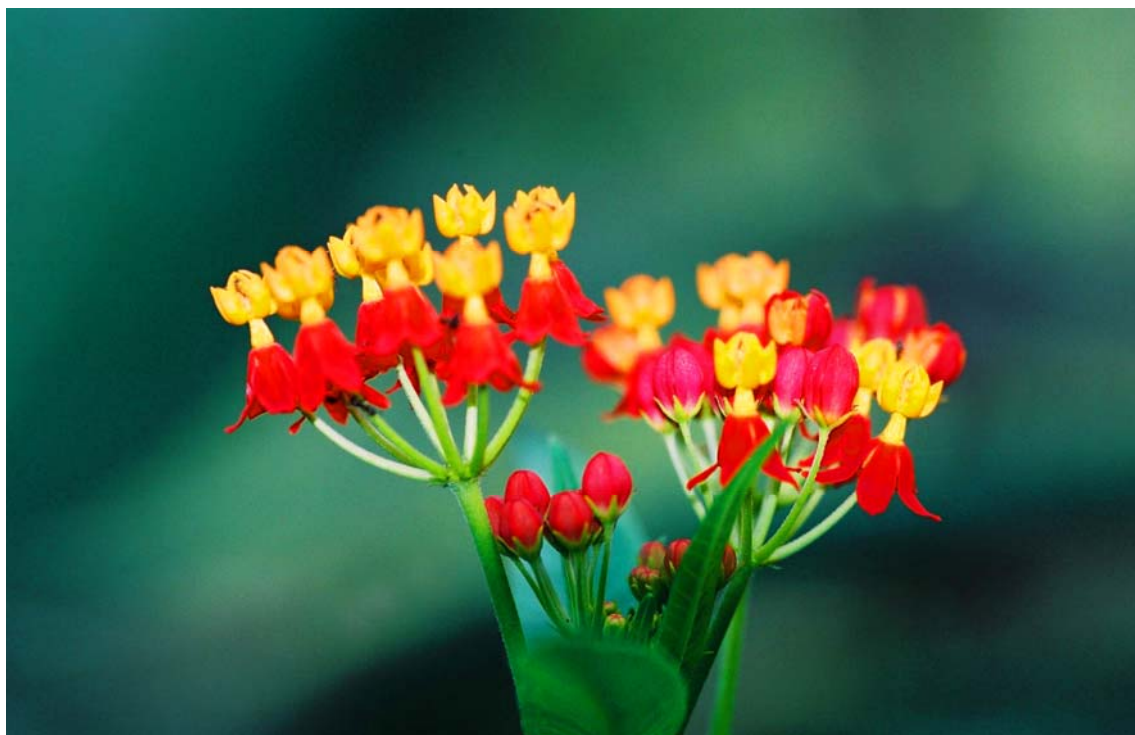
紅花のワタはそんな過去の話を知ってか知らずか美しい花を咲かせる(さいたま市緑区)。



白花のワタもある。庭植えにしても鑑賞にたえられる大きな花である(さいたま市緑区)。



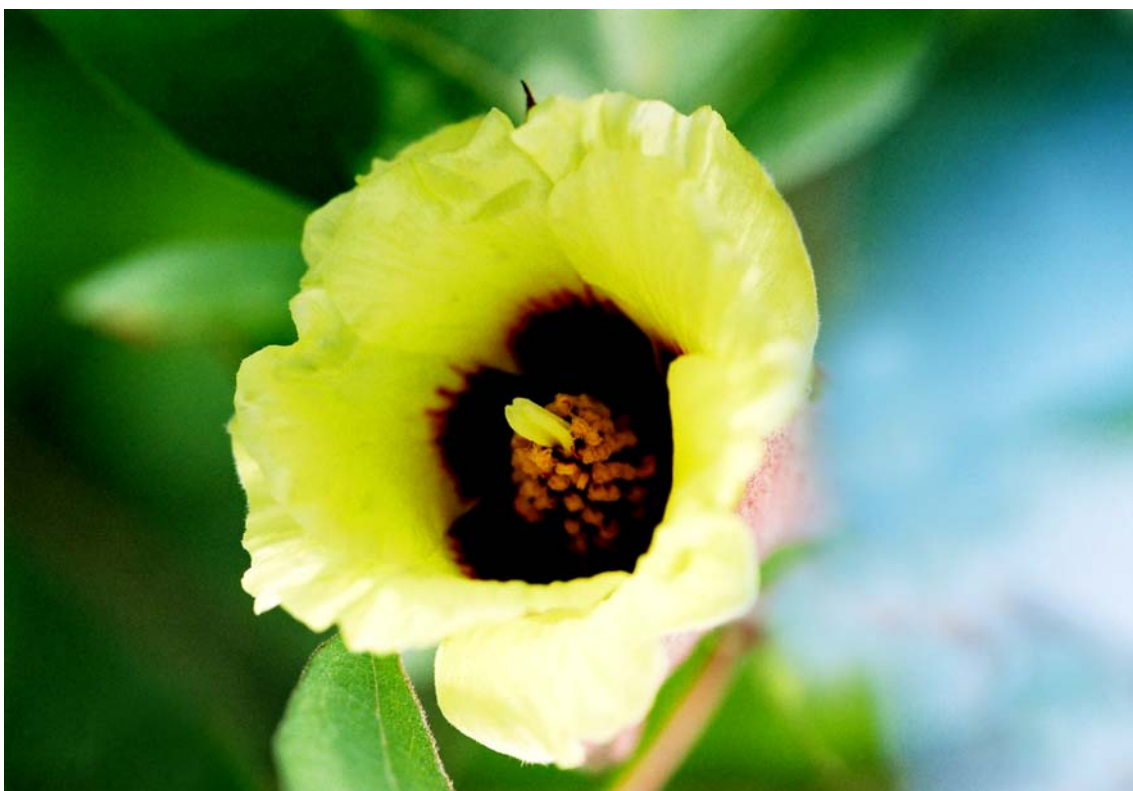
ワタの果実。この果実を収穫するには、ひたすら人手が必要だったのである。このひとつの植物によりアメリカの歴史は築かれ、そして南北戦争が起こった(さいたま市緑区)。



トウワタ(唐綿)の花(東京都小平市薬用植物園)。



トウワタ(唐綿)の種子。綿花には収穫量において、とても及ばなかったから唐綿は人間の歴史とのかかわりにおいて、大きな役割を果たすことはなかった(東京都小平市薬用植物園)。



ナンキンワタ(南京綿)の花。綿の花はどれも美しい(小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)